

安全な農畜産物出荷 への努力を調べよう

年	組
名前	



農畜産物のようすを調べてみよう。

東日本大震災の被害から立ち上がろうとする農業生産の現場での取り組みについて、考えてみましょう。

いったい何が起きたの？

2011年3月11日、日本の観測史上最大となる東日本大震災が起き、各地で強いゆれや津波による大きな被害を受けました。加えて、福島県の太平洋岸にある原子力発電所では、ばく発などの事故が起き、放射性物質（放射線を出すもの）が大気中に放出されました。

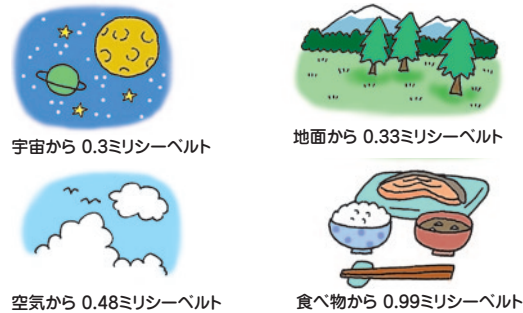
原発事故によって福島をはじめとした各地で、農畜産物の生産現場に放射性物質が降りました。原発事故の直後、基準値をこえる放射性物質が検出されて、農産物や畜産物が出荷停止になったことが、テレビや新聞などで報道され、不安をかき立てたことも事実です。

そのような中、国は平成24年4月、世界的に見ても非常に厳しい食品中の放射性物質の基準値を設定しました。また農業生産の現場では、国の方針にしたがって市町村とJA（農業協同組合）が連携して、細心の注意を払い、厳密に農畜産物の放射性物質の検査を行っています。厳しい基準を満たした農産物や畜産物だけが市場に出荷されています。

ここでは、あまりわくわく知られていない、農家やJAによる農産物や畜産物の安全を確保するための努力をしょうかいします。

■私たちがふだん受けている放射線

私たちは毎日、いろいろなところから放射線を受けています。日本人が1年間に下の図のような自然界から受ける放射線量は、平均2.1ミリシーベルトとされています。



自然界や医りょうで受ける放射線以外に、一般の人が1年間に受ける放射線の限度として認定されている規制値は、1ミリシーベルトとされています。

※「シーベルト」は放射線が人体にあたるえいきょうの度合いを表す単位。

出典：“正しく恐れる”NPO法人青果物健康推進協会

どのように検査をしているの？

事故が起きた原発に近い産地では野菜や果物、肉などを大都市などの消費地に出荷する前に、最新鋭の機器を使って、放射性物質の数値を測定する検査を厳しく行っています。検査ではJAと市町村が連携して、基準値をこえるものは、消費地に出回らない仕組みを整えています。

●果物（もも）の検査



1 検査に使うももを収穫します



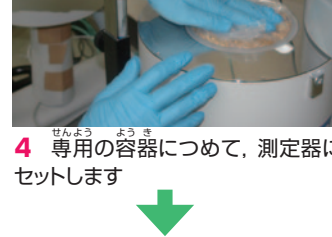
2 検査用に収穫したももです



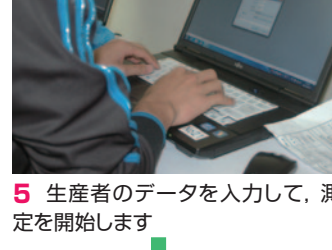
3 細かくきざみます



4 専用の容器につめて、測定器にセットします



5 生産者のデータを入力して、測定を開始します



6 パソコンに結果が表示されます



7 検査後出荷されて、店頭に並びます。世界的に見ても厳しい基準を通った食品だけが市場に出荷されます



除染…果樹の生産現場では、木の皮をけずったり、洗浄したりして放射性物質を取り除きます

●そのほかの農畜産物の検査



牛乳…原乳の冷蔵保管施設（クーラーステーション）や牛乳をつくる工場での検査します。



牛肉…農家ごとに出荷される牛を個別に検査します。



米…収穫前と収穫後に検査します。

農畜産物を売るための努力

福島県やその近郊の産地は、大切に育てて検査を通った野菜や果物、肉、牛乳などについて、少しでも多くの人に買ってもらいたいと思い、販売でもさまざまな努力をしています。



福島産の農畜産物の直売フェア。販売しているものは、検査を通過しています。ラベルをはっきりして、放射性物質を検査していることを知らせています

おいしい農畜産物をたくさん食べてね。



安心して食べてもらえる農畜産物を生産し、出荷するために、どのようにくふうをしているのか書きましょう。